

Title	英詩感情語のメタファーの系譜 第2回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72808
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

英詩感情語のメタファーの系譜 第2回

シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に¹ (Revisit to Emotion terms in Shakespeare's *Sonnets* on the basis of the antithetical pairs)

渡辺秀樹

キーワード：感情語、反義結合 (antithesis)、頭韻 (alliteration)、品詞転換繰返し (polyptoton)

“the Sonnets are addressed to an individual, --to a particular young man whose personality for some reason seems to have filled the soul of Shakespeare with terrible joy and no less terrible despair.”(Oscar Wilde, *The Portrait of Mr. W. H.*)²

§ はじめに

上に掲げたのは、Oscar Wilde 自身のソネット観を小説にして表明した作品からで、筆者はこの小説を大学院生時代から、事あるごとに繰り返し読んできた。Wilde は『ソネット集』冒頭の献辞の中に記された Mr. W. H. を、この詩人に劇作の靈感を与え続けた美少年俳優 Willie Hughes なる人物であると信じてしまった2人の人物を描きながら、Pembroke 伯爵か Southampton 伯爵か、詩や劇の保護者であった身分の高い若い貴族を想定する従来の学界の議論を否定する。これは小説であって論文ではなく、エンタテインメントであって実証研究ではないが、当時の学界の基本的議論は押さえて書かれており、ウィットに富む詩人小説家の手になる『ソネット集』解釈であるから、この詩集の論考には有益な資料なのであり、その内容は冗談では済まされない。

冒頭に引用したのは私が特に注目する部分で、このソネット連作が「詩人の恐ろしいまでの喜びと恐ろしいまでの絶望」“with terrible joy and no less terrible despair.” を歌っている、という捉え方が見えるからだ。感情語は数多くあるのに、そしてこの154編には賞賛、憧憬、欲望、歓び、悲しみ、慟哭、絶望、諦念、肉欲などが繰り返し表明されているのに、この詩集の主題ともいえる「美への称賛」「愛（と自身の詩）の永遠性」という概念、love, beauty, eternity, praise のような語は使わずに、joy と despair が主題であると宣言している。この一見反義的なペアが『ソネット集』の主題であるとする主張を目にしたことが本論考の始まりである。

筆者は昨年度の共同研究プロジェクトにおいて、*The Oxford English Dictionary* (以下 OED) に収められた引用文をコーパスに名詞 fear の用例を収集し、集まった16世紀以降の約3000個の用例を精査・分類して、fear を表象するメタファーの種類を確認し、同時にその反義語は hope であり、hope は伝統的に fear と despair の2つを反義語としてきたことを示した。そこで再確認されたことは、後で詳述するが、(英語の言語文化における概念としての) hope は fear と並存しうるが despair とは並存しない、despair は hopeless の状態の言い換えであるという当たり前の現象である。で、一般的に joy の反義語は sorrow / grief であるが、Wilde は “joy and sorrow” と “hope and fear / despair” とともに述べていないのである。大学2年時以来何度か *The Sonnets* を通読したが、いずれの時も despair が詩集に現れた主たる感情であるとは感じなかった。³ 実際、名詞 despair は本連作中で出現が遅く、第99番以降でかつ3回と少ない(後出の表II参照)。

¹ 本論考は科研費共同研究2件に関わるものである。「基盤研究C 英詩メタファーの構造と歴史」(代表者渡辺秀樹・分担者大森文子)「基盤研究C 英詩メタファーの認知詩学」(代表者大森文子・分担者渡辺秀樹)

² *Complete Works of Oscar Wilde with an Introduction by Vyvyan Holland*. London: Collins, 1966 (1973) p. 1155.

³ 千葉大学2年時に水之江有一先生の Shakespeare の授業で、前期に *The Sonnets* が取り上げられて Dover Wilson 校訂版(1966)が教科書、受講生の数だけ前半の12編を読んだ。東京大学修士1年時には川西進先生の授業で、前期に Shakespeare のものを第1部から24編、後期は Fulke Greville の *Sonnets* を読み、この時は川西先生の詳注版(1971)が教科書で、主に Wilson と Ingram and Redpath (1964)を参考にした。大阪大学に就職した1986年には、高松雄一先生の個人全訳『ソネット集』(岩波文庫)が出版されて、その解説部に *The Portrait of Mr. W. H.* の内容が長く肯定的に説明されており、我が意を得た(pp. 280-285)。1994年以来、関西学院大学文学部の英語史を10年間担当したが、初期近代英語の例として *The Sonnets* を繰り返し取り上げたため、参考に各種日本語訳を収集した。英詩のメタファー研究を専門とする同僚大森文子教授とは *The Sonnets* がきっかけで1996年以来勉強会をはじめ、これが言語文化レトリック研究会設立とその後の科研費共同研究に繋がった。2018年度の大阪大学言語文化研究科修士クラスの英詩メタファー論演習でも *The Sonnets* を取り上げたことも本稿に繋がった。

§ ソネット 154 編の内容と分類

『ソネット集』に収められた 154 編は、一時期に現在の順番通りに書かれたのではなく、同じような主題を持つ幾つかのグループごとに書き継がれたもので、全体は大きく 2 部に分けられること、第 1 番から 126 番までが美青年への愛と称賛を歌い、127 番から 152 番までが、所謂 Dark Lady なる愛人と件の美青年との三角関係を歌っている。終わりの 2 編は愛の讃歌として、直前の Dark Lady シリーズとは関連が薄く、全体の締めくくりとなっている。これについて研究者の見解はだいたい一致しており、順番の入れ替えや一部を Shakespeare 以外の作と主張する学者もいるが、その考えは筆者はとらない。下に示すのは筆者の愛読書である The Temple Shakespeare Series 中の *The Sonnets* の解説部に見える Gollancz 教授の内容分類である。なお表中の Better Angel と Worser Spirit という言葉はソネット第 144 番の第 3-4 行から取ったらしい。

The better angel is a man right fair,
The worser spirit a woman coloured ill. (Sonnet 144, 3-4)⁴

筆者は *The Sonnets* を通読する時には第 30 番以降で幾度かの興味の高まりを感じる。そして 110 番を過ぎたあたりから次第につまらなくなっていくのであるが、この読書感は詩編の内容とレトリックに関係があるのだろう。上記分類を見ると、Gollancz 教授も第 2 部 Dark Lady 編の 26 篇には下位分類を設けておらず、さして感心がない様子が見て取れる。そのように感じる人が多いのではないか。本稿では、感情語を中心にもう一度 *The Sonnets* を見直すことで、この第 1 部の詩想と文体の優位をも確認したい。

表 I Professor Israel Gollancz's Classification of Shakespeare's Sonnets
(*The Temple Edition* (1919) xxvii-xxix)

The Better Angel i-cxxvi (1-126)	I Love's Adoration i-xxvi (1-26)	
	II Love's Trials xxvii-xcix (27-99)	The bitterness of absence xxvii-xxxii (27-32) Envoy 32
		Love's first disillusioning xxxiii-xlii (33-42) Envoy 42
		Love's Longings and Prophetic Fears xlili-lv (43-55) Envoy 55
		Love's Growing Distrust lvi-lxxv (56-75) Envoy 75
		Love's Jealousy lxxv [sic] -xcvi (75-96) Envoy 96
		Love's Farewell Tribute xcvii-xcix (97-99) Envoy 99
III Love's Triumph c-cxxvi (100-126)	Envoy 126	
The Worser Spirit cxxvii-clii (127-152)		
Love's Fire cliii-cliv (153-154)		

⁴ *The Sonnets* からの引用は Dover Wilson 版 (1966) から、参考日本語訳は高松雄一訳 (1986) から取った。

§ 『ソネット集』154編に起きる10個の感情語（名詞・動詞）の出現箇所
The Sonnets に現れる感情語10語の出現箇所を並べて見る。

表II Shakespeare's *Sonnets* における感情語10個の出現一覧 肯定的感情◎ 否定的感情●

	Sonnet	hope 8	fear 17	Despair 3	faith 5	doubt 3	Joy 10	Pleasure 11	Grief 7	Sorrow 7	hate 19
第一部 美青年編	8						◎2x	◎			
	9		●				◎enjoy				
	10										●2x
	20							◎			
	23			●2x							
	25								●		
	26	◎									
	28								●	●	
	29	◎						◎enjoy			
	30									●	●
	34								●		
	38									●	
	40								●		●
	42							◎	●		
	48			●					◎	●	
	50							◎		●	
	52	◎							◎		
	58								◎2x		
	60	◎									
	64			●							
	65			●-ful							
	66					◎					
	75						●	◎	◎		
	86			●							
	89										●
	90								●	●	●
91							◎	◎			
92			●2x-fully								
97	◎							◎			
99			●	●							
104			●								
107			●								
115			●			●					
117										●	
119	◎2x		●2x								
120										●2x	
121								◎			
124			●							●	
126								◎			
第二部 黒婦人編	129						◎2x enjoy				●
	131				◎In good faith						
	136		●								
	140			●						●	
	141					◎					
	142										●2x
	143	◎									
	144				●		●				
	145										●4x
	149										●2x
150										●	
152					◎2x					●	

まず反義ペア fear と hope の現れ方には繰り返しのパターンが認められる。始めに恐れが繰り返され、それから希望が取って代わり、以後、交互に出現しながら第119番において両者が共起し、

詩人心中でこの2つの感情が繰り返し入れ替わることが想像される。その後でまた恐怖が勝ちそうになって最後は希望で終わる。このように hope は fear と共起するが despair とはしない。否定的感情 fear と despair (99), fear と doubt は共起する(119, 144)。喜び (joy, pleasure) と悲しみ (grief, sorrow) が共起しているソネットは第 42 番、48 番、50 番で近接していることが注目される。さらに顕著な分布は joy と pleasure が第 2 部に入ると消えてしまうという事実だ。それとともに反義語の grief と sorrow も出現しなくなり、換わって目立つ感情語は hate である。第 2 部 Dark Lady 編の詩情が暗く憎しみに満ちていることを裏付けている。⁵

名詞・動詞 fear の出現するソネットは第 9, 23, 48, 64, 86, 99, 104, 107, 115, 119, 136 番で、despair の方は第 99, 140, 152 番と後半 Dark Lady 編のみに 3 度現れ、形容詞 desperate は第 147 番に出るが、第 1 部美青年編 (第 1 番～第 126 番) には出ない。この hope の 2 つの反義語の出現状況は不均衡である。8 例の hope に対して fear は 17 例と 2 倍の出現率だが、第 1 部 (第 1 番から 126 番まで) に限ると、先に述べたように第 9 番の fear から 115 番の fear まで hope と何度も交替し、第 119 番で共起するという興味深い現象が見られる。これらのうちで fear が類義語か反義語と共起しているのが第 48, 99, 119 番である。

後節では筆者が傑作と考える数篇のうち、sorrow と hate が共起する 30 番、数少ない faith の見られる 66 番を、関連する表象や技法の見られる他篇と比較しながら再考し、シェイクスピアの詩のレトリックの特徴を再考する。これを踏まえて、最後に第 119 番の比較的長い考察を行ないたい。⁶

§ 傑作ソネットのレトリック

平井正徳氏はこう言う。

シェイクスピアの書いた言語で彼の劇作品に接し、十分な反応を示しうるアングロ・サクソン系の人々の理解とわれわれの理解との間に大きなへだたりがあることも厳粛な事実である。妥当な比喻ではないが、彼らの目に、心の目に実に多彩な陰影の多い心象としてうつるものが邦訳を通して見るわれわれの目には単彩的な、あるいは単純な原色のなものとしてかうつってこないのではないだろうかと思う。多彩と単彩 (あるいは原色) との対比という比喻をさらに拡大してゆけば、彼の描く一つの心象、一つのせりふ、一つの場面の持つ意味の多義性とわれわれの側におけるそれらの受けとめ方の示す単義性ととの対比ということまでもっていけよう。⁷

シェイクスピアの詩文の多義性と我々の単義的な理解の隔たりは、翻訳で接した場合に顕著に表れるが、外国人として英語を学習した者には常に起きていることである。特に原文での理解が難しい表現形式は私見では「掛け言葉」(punning, double meaning) や類音による意味拡張で、これらは Geoffrey Leech, *A Linguistic Guide to English Poetry*(1969: 210-211) の punning と wordplay の分類によれば 1. Punning Repetition, 6. Play on similarity of Pronunciation に当たる。また類義語のニュアンスの差や使い分けも外国人には理解し難く、それに比べると反義語並列 (antithesis) や撞着語法 (oxymoron) などは直覚しやすいようだ。

『結句有情』の中で櫻井正一郎氏は「シェイクスピアは全部で百五四篇を数える『ソネット集』を書いたが、その中で傑作と呼びうるソネットの数が極めて少ないのである...傑作と呼びうるものは、人によって五つとも七つともいおうが、10 を越えることはまず無いであろう。」と言う。⁸ 筆者は『ソネット集』を校訂版英文で 2 度、1609 年の初版で 2 度通読し、各種の日本語訳で何度か読んできたが、この「18 世紀に遡るといふ詩人としてのシェイクスピア蔑視」の見解には与しない。とは言え、上述の『ソネット集』の構成から見て、第 2 部の Dark Lady 編は全く好まないし、第 1 部の初めの 26 編、所謂 I-THOU Sonnets も、その後の幾つかで歌われた absence 「不在」のテーマに比べてかなり劣ると考えている。

⁵ joy と pleasure の出現状況の特異性については大森文子教授に指摘を受けた。

⁶ 第 29, 40, 42, 48, 50, 75, 90, 119, 124, 129, 152 の 11 篇に反義的感情語の共起が見られる。

⁷ 平井正徳「シェイクスピアの詩」(1964: 106)。

⁸ 『結句有情』pp. 229-230.

筆者が傑作と考えるのは第 30 番、第 66 番、第 71 番で、その理由は「目と心の戦い」などの奇想が表れていないこと、同一語の繰り返しとヴァリエーションが素晴らしいこと、終わりの couplet での詩想の要約と逆転が鮮やかで胸を打つからである。

第 30 番はこうだ。

When to the sessions of sweet silent thought
I summon up remembrance of things past,
I sigh the lack of many a thing I sought,
And with old woes new wail my dear time's waste:
Then can I drown an eye, unused to flow,
For precious friends hid in death's dateless night,
And weep afresh love's long since cancelled woe,
And moan the expense of many a vanished sight:
Then can I grieve at grievances foregone,
And heavily from woe to woe tell o'er
The sad account of fore-bemoaned moan,
Which I new pay as if not paid before.
But if the while I think on thee, dear friend,
All losses are restor'd and sorrows end. (Sonnet 30)

櫻井氏はこの 30 番を傑作として 6 ページを当てて、12 行までの法廷用語と金銭貸借用語を散りばめたところが読みどころで、終わりの 2 行の逆転の鮮明さと素直さは出色である、と述べている (pp. 281-286)。筆者はさらに「悲しみ・苦しみ」の意の類義語の言い換えと、そのしつこいまでの繰り返し、世の中の不条理に飽き飽きしている詩人の気持ちを読者に伝染させ追体験させて、それらが結句の複数形 sorrows によって纏められ、逆転させる効果を高めていると見るのだ (下線部参照)。本稿を書きながら初めて気付いたが、初めの 4 行連で things past (l. 2), old woes (l. 4) と、これから述べ立てる悲しみや喪失を複数形で示しているが、第 9 行の grievances も foregone という past, old とは異なる形容詞を備え、これら 3 句は things > woes > grievances と過去の出来事 > 禍い > 悲しみと、まるで *Hamlet* の第 1 幕で先王の亡霊を thing, figure, fantasy, fancy, apparition などと登場人物皆が言い換えながら明確にしていくレトリックを彷彿させる。結句の sorrows が同行の losses とともに形容詞なしであるのが、第 12 行までのくどいまでの繰り返しに対して、潔い感じを与えていないだろうか。他のレトリックとしては、grieve at grievances (l. 9), fore-bemoaned moan (l. 11) new pay as if not paid (l. 12) に見られる polyptoton 「品詞転換繰り返し」が、類義語言い換えを補助していることに注目すべきだろう。

第 66 番でも結句の逆転が顕著である。

Tired with all these, for restful death I cry,
As to behold desert a beggar born,
And needy nothing trimm'd in jollity,
And purest faith unhappily forsworn,
And gilded honour shamefully misplaced,
And maiden virtue rudely strumpeted,
And right perfection wrongfully disgraced,
And strength by limping sway disabled
And art made tongue-tied by authority,
And folly, doctor-like, controlling skill,
And simple truth miscalled simplicity,
And captive good attending captain ill:
Tired with all these, from these would I be gone,
Save that, to die, I leave my love alone. (Sonnet 66)

このソネットのレトリックはまず anaphora (首句繰り返し) で、第 3 行から 12 行まで 10 行が接続詞 and で始まっている。これは第 30 番に見えた「悲しみ・禍い」の類語の繰り返しとまた別の執拗さで、かの Will Sonnets、就中第 135 番の will の 13 個の出現や第 137 番での疑問文の列

挙 (what, why, whereto, why, which) と通じるしつこさである。この世の中の不合理・不条理が連ねられて、際限なく読者の心を暗くする、まるで諺か警句集のようで、愛の詩とはとても感じられない。しかし、最終行の “Save that, to die, I leave my love alone.” が「しかし死にはしない」と先行内容（こんな不条理な世の中から死んで楽になりたい）を全部打ち消し、「あなたをこの世に一人残したくないから」と深い愛情の吐露に終わるのである。第1行と結句第13行の “Tired with all these” は epanalepsis（隔行繰り返し）というレトリックであり、結句が先行内容の纏め要約になっていることを予想させるだろう。だがしかし、先の these は cataphora「後方照応」であり、後の these の anaphora「前方照応」と対照的であるし、続く “from these would I be gone” が “for restful death I cry” のヴァリエーションになっている。

そして筆者が考える最高傑作は第71番であり、このソネットでは中心名詞 world が3回、the world (l.3), this vile world (l. 4), the wise world (l. 13) とヴァリエーションを付けて現れて、自分が死んだあとは、その詩とともに忘れてほしいこと、私を思い出してあなたが悲しむなら忘れてもらった方がよいから」と述べた後に、「残ったあなたが私の詩のことで嘲笑されないように」と転じるこの the wise world の皮肉が効いている。この情感を高めているのは第3行から始まる <w>の頭韻で、8行目の woe を経て結句での this wise world という頭韻句に収斂するのだ。第13行の名詞 moan は第1行の動詞 mourn のエコーとなり、かつ次行の mock と行間頭韻 (interlinear alliteration) で結ばれ、「世間の嘲笑が貴方の苦しみになる」と意味の結合を強める。否定形 remember が反義語 forgot で強調されているが、ソネット第1行が “No longer mourn” と否定命令文であり、この “remember not” を経て第11行の “Do not rehearse” と形式の異なる否定命令文3個が繰り返されていることは注目すべきだ。この繰り返しで、見かけは友人に「私を忘れて下さい」と頼みながら、第12行で頭韻でカップリングされた your love と my life を並べて、あたかも両者が分かちがたい一体として提示されている（下線部と太字、網掛け部参照）。結句、忘れてほしいのは第66番ソネットでも繰り返されていた不条理や不合理の溢れるこの世の中のことであり、貴方の私への愛、つまり私の命・人生そのものが土塊の中で一緒に朽ちて行くことを願う (clay (l. 10), decay (l. 12)) 力強い逆説的な求愛表現となっている。⁹

No longer mourn for me when I am dead
 Than you shall hear the surly sullen bell
 Give warning to the world that I am fled
 From this vile world with vilest worms to dwell:
 Nay, if you read this line, remember not
 The hand that writ it, for I love you so,
 That I in your sweet thoughts would be forgot,
 If thinking on me then should make you woe.
 O! if, I say, you look upon this verse,
 When I perhaps compounded am with clay,
 Do not so much as my poor name rehearse;
 But let your love even with my life decay;
 Lest the wise world should look into your moan,
 And mock you with me after I am gone. (Sonnet 71)

頭韻と類音が主題に関わる時、いかに詩情を高めるかを如実に示す類例は第73番である。

That time of year thou mayst in me behold
 When yellow leaves, or none, or few, do hang
 Upon those boughs which shake against the cold,
 Bare ruined choirs, where late the sweet birds sang.
 In me thou see'st the twilight of such day
 As after sunset fadeth in the west;
 Which by and by black night doth take away,
 Death's second self, that seals up all in rest.

⁹ このソネット第71番の否定命令文の連続と終わり数行の解釈は大森文子教授から示唆を受けた。

In me thou see'st the glowing of such fire,
 That on the ashes of his youth doth lie,
 As the death-bed, whereon it must expire,
 Consumed with that which it was nourish'd by.
 This thou perceiv'st, which makes thy love more strong,
 To love that well, which thou must leave ere long. (Sonnet 73)

これは詩人が自分の老いと衰退を仮想して、第1連で冬の枯れ木、第2連で夕暮れと夜、第3連で燃え尽きようとする炎と灰に喩えて、結句では、このように自分がやがてこの世から去ることを思えば、自分への愛が強まるはずだと、友人に諭す形で、実は懇願する詩と見る。3つの4行連で展開される3つのメタファーは列挙でありヴァリエーションであり、表象として珍しいものではないが、結句2行での<I>の頭韻が見事としか言いようがない。第13行の thy love が行間頭韻 (interlinear alliteration) で最終行に繋がり、to love と品詞転換繰り返し (polyptoton) の技法で結びついており、“leave ere long” 「間もなく (この世から) 去る」の動詞句は第2行での “yellow leaves” 枯れ葉」と同音異義語の繰り返しにあり、「老いる・死ぬ」の意味のヴァリエーションを構成しているからだ。¹⁰

また否定文を連ねるレトリックは有名なソネット第116番にも見られる (下線部参照)。

Let me not to the marriage of true minds
 Admit impediments. Love is not love
 Which alters when it alteration finds,
 Or bends with the remover to remove:
 O, no! it is an ever-fixed mark,
 That looks on tempests and is never shaken;
 It is the star to every wandering bark,
 Whose worth's unknown, although his height be taken.
 Love's not Time's fool, though rosy lips and cheeks
 Within his bending sickle's compass come;
 Love alters not with his brief hours and weeks,
 But bears it out even to the edge of doom.
 If this be error and upon me proved,
 I never writ, nor no man ever loved. (Sonnet 116)

このように14行中に否定語が9回形を変えて繰り返されて (not 4回、never 2回、no 2回、un- 1回)、「愛は不変」のテーマの変奏を演じ、最後の “I never writ, nor no man ever loved” が「私の貴方への愛は本物で、この愛の詩は永遠である」ことを逆説的に強調するのだ。

第116番では北極星を見上げる船乗りが愛を指針とする詩人の心の表象とされているため、詩のイメージとともに詩想が高みに達するかの如く思われる。第71番に見られる一体感、友人と自分が分ち難く二つで一つという考えは、第22番、36番、62番にも出ている。第71番はこれらを前置きとして、墓穴の表象が用いられていることも手伝い、これらを超える深みに達する感を与える。¹¹

以上3つの傑作ソネットを他の2篇と比較しながらレトリックの様相を見てきたが、メタファー研究の視点からそのメタファーに深みを与えるレトリックとして、筆者が評価するのは、頭韻語の組み合わせ方、頭韻による意味結合の強化類義語での言換えによる重層性、反義語の効果的な組み合わせ、巧みな語句と構文の繰り返し、ヴァリエーションでの内容言い換えである。

§ ソネット 119 番

そして最後に考察したいのが反義語の対照法 (antithesis) が見られる第119番である。この編では3行目に “Applying fears to **hopes**, and **hopes** to fears” という反義語並列に加えて、要素の順序

¹⁰ この第73番についての諸家の解釈の検討は『結句有情』(pp. 300-308) に詳しい。

¹¹ 第71番のソネットの内容と番号の関係について Colin Burrow (p.522) は興味深い解釈を紹介している。“The expected term of life is threescore and ten (70) years; as Duncan-Jones notes, the 71st sonnet turns to thoughts of death.”

を逆転させる交差配列法 (chiasmus) も同時に見られ、このレトリックの合体が以下に続く “Still losing when I saw myself to win!” (line 4), “benefit of ill” (line 9), “that better is by evil still made better” (line 10), “gain by ills” (line 14) という撞着語法 (oxymoron) を導く契機となっている。

What potions have I drunk of Siren tears,
Distilled from limbeck's foul as hell within,
Applying fears to **hopes**, and **hopes** to fears,
Still losing when I saw myself to win!
What wretched errors hath my heart committed,
Whilst it hath thought itself so blessed never!
How have mine eyes out of their spheres been fitted,
In the distraction of this madding fever!
O benefit of ill! now I find true
That better is by evil still made better;
And ruined love, when it is built anew,
Grows fairer than at first, more strong, far greater.
So I return rebuked to my content,
And gain by ills thrice more than I have spent.

地獄のように穢らわしいランビキから蒸留した
魔女の空涙を、私はどれだけ飲みほしたか。
希望は不信でおさえ、不安には希望を処方し、
それでも、勝ったと思っただけはしょっちゅう負けた。
わが心は無常の至福にめぐまれたつもりで、
その実、なんとみじめな過ちを犯したか。
この気ちがいじみた熱病の仕かける錯乱にとらわれて、
わが眼球はいかに眼窩を飛びだし、癪にふるえたか。
ああ、なんとという悪の恩恵よ、いまこそ私は思い知った、
良いものは悪の試練をへてさらに良くなり、
こわれた愛は、あらたに建てなおせば、
前より美しく、強く、はるかに大きくなることを。
だから、私は罰を受けてわが歓びのもとに帰るのです。
悪業のおかげで、費やした分の三倍を手にするのです。

(Sonnet 119)

シェイクスピアの撞着語法と言えれば決まって言及されるのが、以下に引用する「ロミオとジュリエット」第1幕のロミオの台詞である。

Why then, O brawling love! O **loving hate!**
O any thing, of nothing first create!
O heavy lightness, serious vanity,
Misshapen chaos of well-seeming forms,
Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health,
Still-waking sleep, that is not what it is!
This love feel I, that feel no love in this. (R & J I. i.176-82)

相手のジュリエットも同じく “My only **love** sprung from my only **hate!**” と love と hate を結びつけて身の上を嘆くのだが、劇の初め (Act 1, scene 1) のロミオでは、Rosaline という名の娘への叶わぬ恋を撞着表現を並べ立てて嘆いている、軽薄さも漂うセリフであるのが、後の場 (Act 1, scene 5) でのジュリエットのそれは、現実に「敵対する家の子同士の恋」とわかった、つまり **hate** と **love** が同時に存在する関係を表したもので、後に「夫が従兄の殺害者になる」ことも予告するような深刻なものに変っていることは注目されて良いだろう。

Omori (2012: 192-202) では British National Corpus から集めた用例の比較から、3 個の感情名詞 hope, fear, despair のメタファー表現の根源領域の相違を考察し、まず hope vs fear と hope vs despair の 2 組の反義ペアが存在し、hope の典型的メタファー根源領域は炎、fear は流水、despair は不毛の土地であることを突き止めた。この現代英語の傾向を参考に、筆者はメタファー根源領域の歴史性の検証及び fear のメタファー根源領域の精査のために、昨年度の共同プロジェクト寄稿論文 (渡辺 2018) 執筆に際して *The Oxford English Dictionary* 中の用例文をコーパスにして、名詞 fear の現れる近代英語期以降の約 3000 の引用文を集めた。その中から fear が接続詞 and か or で結ばれて対句を形成する用例をつぶさに比較分類したが、まず hope と fear の (順序の前後する例も含む) 共起が 34 例に対し hope と despair の対句は 3 例のみと少ないこと、fear と despair は *OED* 中の用例では共起しないことが判明した。そして感情名詞 fear がメタファーで用いられる時には、17 世紀以降の傾向として、震え、叫ぶ人への擬人化、猛禽と獲物になる鳥、色では pale が典型、温感表現では chill(y) が典型であることもわかった。

これら 2 件の現代英語と近代英語期以降の用例調査から言えることは、英語の言語表現においては、

- (1) 感情語 hope の反義語には fear と despair の 2 個がある、
- (2) その 2 語の反義概念は、典型的なメタファー根源領域の違いからも共起しにくいこと、

(3) hope と fear は今後起きうる事への相反する思いで、起きて欲しいことと起きて欲しくないことの対比であり、事態が起きるか起きないかは確定していない時の感情である、つまり一人の心中で同時に（程度の差があつて）共存しうる、

(4) それに反して despair は予期した悪い事態が起きたのを確認した心理である、つまり hopeless であり、hope のもう 1 つの反対状態の fear もないのである。

ロミオとジュリエットに見える “loving hate” と “My only love sprung from my only hate!” は普通反義と考えられている 2 つの感情が同時に存在しうることを劇の筋立てから見事に証明しているが、今問題にしているソネット第 119 番においても第 3-4 行に “Applying fears to hopes, and hopes to fears, / Still losing when I saw myself to win!” と反義感情 fear と hope が並列共起し、それらが複数形をなしていることで、揺れ動く心理が見事にあらわされている。読者の我々は、今のべた hope, fear, despair の関係を知ること、この詩における反義語の共起の理解が一步深まるのではないか。第 119 番ソネットの「私」は決して絶望していないこと、相手の不在や不義によって自らの愛がさらに強まり純化されることを確信（または自分に確信させようと）していることを、撞着語法と反義語並列で自らにも示そうとする、その撞着語法表現開始が第 3 行の “Applying fears to hopes, and hopes to fears” なのである。

先にも述べたがソネット集で名詞・動詞 despair は 3 度しか現れず、第 99 番では詩人（私）ではなくて白薔薇の花が絶望しているのである。これ以降では終り近く 140 番と 144 番において詩人の絶望感を表しているが、これらは表 II で示した通り Dark Lady 編（第 127 編から 152 編）26 編での出現であり、美青年への愛を謳った第 1 部 126 編には despair は現れないのである。ソネット集における fear は hope と同時に詩人の心に存在する感情なのであり、時によってその優劣や量が変化するのである。繰り返すが、この心理状況をうまく表すのが “Applying fears to hopes, and hopes to fears” という複数形での hope と fear の反義語並置なのである。

紙数と時間の制限があるので本稿は結論を書かずにここでひとまず終わる。表 II で示した 10 個の感情語の分布状況だけ見ても、まだ考察すべき事柄が多々残っている。次稿では今回の調査では扱わなかった anger, comfort, envy, jealousy, moan, wail, woe, wrath とその形容詞・動詞形、そして名詞・動詞の love の出現状況（多寡と共起関係）を確認し、シェイクスピアのソネット集に見られる感情語に関わるレトリックの技法を引き続き論考したい。

参考文献

校訂・注釈版

Burrow, Colin, 2002. *The Complete Sonnets & Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford University Press.
Gollancz, Sir Israel, 1919. *Shakespeare's Sonnets*. The Temple Shakespeare. London: J. M. Dent & Sons, Ltd.

Ingram, W. G. and Redpath, Theodore, ed. 1965. *Shakespeare's Sonnets*. Barnes & Nobles, Inc.

Wilson, John Dover, 1966. *The Sonnets*. The New Shakespeare. Cambridge University Press.

----, 1969. *The Poems*. The New Shakespeare. Cambridge University Press.

The Noel Douglas Replicas William Shakespeare Sonnets. 1926. London: Noel Douglas.

The Arden Shakespeare on CD-ROM. 1997. Thomas Nelson & Sons Limited.

『シェイクスピア大全』2003. 東京：新潮社。

川西進 1971. *Shakespeare's Sonnets*. <ソネット集>東京：鶴見書店。

嶺卓二解説注釈 『ソネット集』研究社小英文学叢書 東京：研究社。

研究書・翻訳

- Su, S. P. 1994. *Lexical Ambiguity in Poetry*. Harlow: Longman.
- Wilde, Oscar, 1889. "The Portrait of Mr. W. H.," in *Blackwood's Edinburgh Magazine. Complete Works of Oscar Wilde*. London: Collins. (1966) 1150-1201.
- 梅田倍男 1989. 『シェイクスピアのことば遊び』 東京：英宝社.
- , 2005. 「『ソネット集』のレトリック」『シェイクスピアのレトリック』 東京：英宝社.
- 櫻井正一郎 1979. 『結句有情 英国ルネサンス期ソネット論』 山口書店.
- 柴田稔彦編 2004. 『対訳 シェイクスピア詩集』 イギリス詩人選 (1) 岩波文庫 東京：岩波書店.
- 高松雄一訳 1972. F.T.プリンス 『シェイクスピア 詩』 英文学ハンドブック 「作家と作品」 東京：研究社.
- 高松雄一訳 1986. 『ソネット集 (シェイクスピア作)』 岩波文庫 東京：岩波書店.
- 坪内逍遙訳 1935. 『詩編』 シェイクスピア全集 東京：中央公論社.
- 中西信太郎訳 1981. 『シェイクスピア ソネット集 (完訳)』 東京：英宝社.
- 福田恆存訳 「W・H氏の肖像」『アーサー卿の犯罪』 中公文庫 東京：中央公論社 129-192.
- 吉田健一 2007. 『シェイクスピア / シェイクスピア詩集』 平凡社ライブラリー 東京：平凡社.

論文

- Andriyanti, Erna, (year not known) "Play of Antonyms in Shakespeare's Romeo and Juliet," Universitas Negeri Yogyakarta.
- Leech, Geoffrey, 1968. *Semantics*. Middlesex: Penguin Books.
- , 1974. *A Linguistic Guide to English Poetry*. Harlow: Longman.
- Omori, Ayako, 2012. "Conventional Metaphors for Antonymous Emotion Concepts," *Dynamicity in Emotion Concepts*. Frankfurt am Mein: Peter Lang. 183-204.
- Whittier, Gayle, 1989. "The Sonnet's Body and the Body Sonnetized in Romeo and Juliet," *Shakespeare Quarterly* 40: 1, 27-41
- 大森文子 1994. 「オクシモロンについての一考察」『言語文化研究』 20: 65-85.
- , 2018. 「喜びと悲しみのメタファー：ShakespeareのSonnetsをめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』 (大阪大学言語文化研究科) 19-28.
- , 2018. 「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 I』 (鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京：ひつじ書房 175-194.
- 平井正穂 1964. 「シェイクスピアの詩」『シェイクスピア案内』 東京：研究社. 105-121.
- 渡辺秀樹 1994. 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』 東京：研究社 140 (6): 17-19.
- , 2004. 「人名のメタファー研究序章：シェイクスピア劇の登場人物名に由来する OED2 の見出し語と用例再考」『メタファー研究の方法と射程』 (大阪大学言語文化研究科) 23-33
- , 2011. シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック 動物名人間比喻用法の対義・類義の構造」『文化とレトリック認識 言語文化共同研究プロジェクト 2010』 (大阪大学言語文化研究科) 1-20.
- , 2011. 「英語史とコロケーション」『これからのコロケーション研究』 (堀正広編) 東京：ひつじ書房 153-192.
- , 2018. 「英語感情メタファーの系譜 第1回 序及び fear」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』 (大阪大学言語文化研究科) 1-18.

インターネットでの閲覧

Hammond Paul, ed., *Shakespeare's Sonnets: An original-Spelling Texts*. Oxford University Press.
<http://www.oxfordscholarlyeditions.com/view/10.1093/actrade/9780199642076.book.1/actrade-9780199642076-book-1>

Google Books で閲覧

Paterson, Don, ed., 2012. *Reading Shakespeare's Sonnets: A New Commentary*. Faber & Faber, 2012

West, David, ed., 2007. *Shakespeare's Sonnets*. Harry N. Abrams.